

昭和十四年三月五日發行 第二十四號

# 加能人

第三年 第三號



故櫻井男爵の孫と女息令  
(昭和二十年英出の原主記圖影)

特輯・故櫻井錠二男爵追悼

號

月

三



# 帝國學士院長樞密顧問官 櫻井錠二男爵薨去

## 依勳功特授男爵

### 學界七人目のこの榮譽

畏き邊では、樞密顧問官帝國學士院長正二位勳一等理學博士櫻井錠二氏（金澤市出身）に對し、同博士が多年學界に盡したる功を思召され、特に男爵を授けらるゝ旨一月廿八日附左の如く御沙汰があつた。

臣下としての授爵は昭和十一年鈴木貫太郎大將に男爵を賜つて以來のこと、學界の人としては七人目で、昭和三年の佐藤昌介男から十一年ぶりである。

正二位勳一等 櫻井錠二  
依勳功特授男爵

## 胸を打つその臨終

### 最後まで我學界を思ふ

櫻井錠二博士は、一月廿三日から肺炎で、東京市本郷區曙町の自邸で帝大名譽教授三浦博士の治療を受けてゐた

が、廿八日心臓病併發、危篤に陥つたので、家人親戚知人が枕頭につめかけ、畏き邊りよりは午後三時御使を差遣はされ、果物一籠を下賜あらせられた。

博士は最後の息の下から、今夏アメリカで開かれる第六回汎太平洋學術協會の對策や學術振興會の發展策など思ひ至るまゝに口授して並み居る人々の胸を打ち、午後十一時遂に八十二歳の高齡を以て薨去した。

折柄前項記の如く授爵の有難き御沙汰の趣きのお電話があり、令嗣武雄氏が直に參内して御沙汰を拜してきたがつめかけてゐた遺族一同は光榮に感泣した。

更に一月卅日、博士生前の功勞を思召され、左の如く勳章加授の御沙汰があつた。

樞密顧問官正二位勳一等男爵 櫻井錠二  
授旭日桐花大授章

## 葬儀に宮家の御代拜

故櫻井男爵の葬儀は、二月一日午後一時より青山齋場において神式により

しめやかに執行された。葬儀委員長田中館愛橋博士を始め平沼首相 各大臣、平賀帝大總長、各樞密顧問官等朝野各方面の名士多數參列、正面祭壇には秩父宮、伏見宮、高松宮各宮家を始め各方面より贈られた榊花輪供物で飾られ秩父宮家の代拜に次いで、荒木文相の博士の逝去を悼む切々たる弔辭は居並ぶ參列者に今更ながら博士の功績を偲ばさせた。

## 科學界最高權威

### 三聖代に亘る國際的活躍

故男爵は、明治四年十四歳にして金澤から上京大學南校に入り、同九年十九歳にして、英國留學を命ぜられた。

滞英五ヶ年拔群の成績を以て歸朝するや、東京帝國大學理學部に理論化學及び有機化學を擔任して初めて外人教師に代つて講義した。同廿一年理學博士となり、東大理科大學長、總長事務取扱を歴任し、大正八年東大を停年退官し、東大名譽教授となつた。同九年貴族院議員に勅選され、四十五年樞密顧問官及び帝國學士院長に擧げられ今日に至つた。

昭和十二年には宮中杖を差許されたが、海外各國からも名譽學位、名譽會員をうくること數知れず、わが科學界最高權威の一人としてその名は世界に

高かつた。溫良廉潔な典型的の學者でわが學界にとつては學術振興會（理事長）その他多數の學究機關に重要な役割をつとめ忘るべからざる功績がある。博士の自らの科學探究の足跡とともに明治、大正、昭和三聖代を通じて、わが科學界に一エボツクを作つた恩人であり、わが學界の父である。

## 盛賑な一家團欒

### 子息九名愛孫四十一名

非常な子福者で、現在左の九名がそれ／＼家を持ち、令孫は四十一名を數へ、毎年一回のクリスマスには、令孫を集めて美しい團欒の夕を開いてゐた。學究櫻井の半面を語る逸話といふべきである。（表紙寫眞參照）

- 當主三男武雄(五三) 豫備海軍機關大佐
- 二男 時 雄(五五) 法學士
- 五男 季 雄(四四) 理化學研究所員、理博
- 六男 春 雄(四〇) 東京工業大學助手
- 八男 信 雄(三三) 早稻田工手校講師
- 長女 峯 子(四九) 法學士鈴木正美妻
- 二女 文 子(四〇) 理博鈴木庸生妻
- 三女 皆 子(三七) 愛媛縣芳賀義雄妻
- 五女 滿 子(三七) 工學士服部謙次妻

## 綿密周到な遺書二通

遺書から「畧歴(後頁記)」と「葬儀に關する注意若くは希望」の二つが発見された。昨年七月に書かれたもので何れも質素な便箋にペンで楷書のインクのおとも鮮かに記され、簡単な茶色の封筒に入れて保存されてゐた。何事にも綿密で周到な心構へをもつて臨んだ人格がその中に躍動してゐる。

## 葬儀に關し詳細な注意

「葬儀に關する注意」には、先づ死後は直ちに遺骸を書齋に移し、東側に六枚屏風を立て、その頭を北に向ける事から、帷子を白羽二重にする事、弔問客の通し方、供物、幕の張り方等微細な事までに及び、死亡通知の文案、出す先きの宛名その他至れり盡くせりのもので、この外に自分のした事を細かにノートしたのもあると。

## 好きだつた學生食堂

故男爵は研究心が頗る強く、身を持するに極めて謹嚴であつたが、人に接しては時に冗談もいひ濃厚そのものであつた。よく後進を愛し、屢々帝大の食堂に姿を現はし、若い學徒と意見を

交換しながら晝食をとることを楽しみにしたこともある。嘗つて中等教員の檢定試験を受けに來た五高の助手が、成績がよいので、博士のきも入りで大學へ入學した。これが後の横濱高工校長となつた鈴木達治氏である。

## ロンドンで改名錠二

舊名錠五郎であつたのをロンドン大學在學中錠五郎では長過ぎるといふので、錠二と改名した。ロンドンと言へば、男爵最初の洋行で五年間留學の地であり、また最後の洋行は昭和十二年七十九歳の高齢で、萬國學術研究會議總會に副會長として出席のため渡航、一生終始由縁の地であつた。

## 後進の爲異常な熱意

生前「自分は五十を越してから、研究の上で人を指導して行く能力は乏しくなつたと思ふ。それ故、若い學徒の働く場所と金とを心配するために全力を注ぐ決心である。」と話されてゐた。この聖者にも近い謙虚な言葉はそのまゝに實現されて、教授の停年制、理化學研究所、學術研究會議、日本學術振興會など次々に難事業の完成を、壯者の如き熱意をもつて遂行した。

## 日露戰に毒瓦斯發明

櫻井博士の直弟子で同博士の後を襲

うた、東大名譽教授帝國學士院會員理博片山正夫氏は語る。「日本の化學界を世界の水準にまで育てあげられたのは全く先生お一人の力で、今日活躍してゐる人々は皆弟子や孫弟子である。先生は學者だつたばかりでなく、化學兵器の創始者であつて、日露戰役當時難攻不落の旅順戰線へ、早くも瓦斯彈を發明して送附された。これが到着する前に旅順が陥落して使用しなかつたが歐洲大戰の十五年も前に既に毒瓦斯を考へつかれた非凡な博士には敬服してゐる次第です。」

## 素人藝を脱した實生

故男爵は風流人で、特に謠曲にいたつては二十餘年のたしなみで、實生流の近藤師に師事して、素人の域を脱し麗明なものであつた。大先輩と加賀實生、うれしい取合はせである。

## 秀才で盛名の三兄弟

故男爵の令兄は、永年東京高等師範學校長だつた櫻井房記氏既に亡く、次兄工學博士の櫻井省三氏(八四)が海軍造船大監として海軍大學教官となり明治卅二年退官、浦賀船渠工場所長其他實業界に活躍し、現在東京市本郷區駒込西片町一〇ろ、の邸宅に健在である。三人兄弟共に學界に活躍し、秀才兄弟として郷黨間の崇敬を集めてゐた。

## 昭和十一年の御來澤

第四高等學 市村 塘

櫻井錠二先生の御長逝を知つたとき、自分は驚愕と、何ともいへぬ寂莫の感を深くしたのであつた。自分が先生に始めて對面したのは明治二十五年、四高卒業後東京帝大理科大學へ入學の際、願書に保證人が當時必要であつたので、郷里の大先輩といふところから、それを御願ひに上つたときであつた。すぐ心よく御承諾あり旁々大學生としての心得を諄々訓された。

自分が先年、啓明會や振興會から、自著「日本藥用植物圖譜」の出版費や、「續日本藥用植物圖譜」の研究費の補助を得たのも、みな先生が關係して居られたので、何かと好都合に運んだことを大に感謝して居る。

先生が故郷金澤へ最近、御出になつたのは昭和十一年十月で、丁度金澤で第十二回日本學術協會の大會開催のとき「日本學術振興會の使命」の演題で理事長として講演せられた際であつた。御滞在三日間は御寸暇なく、自分も役員で忙敷色々御懇談の機會を失したのは實に遺憾であつた。近年特に趣味として謠に御熱心で、其前からの御申出の謠曲の御相伴も果し得なかつたことを今も残念に思つて居る。

昭和十二年萬國學術協會々議に副會長としてロンドンへ御出張、大に賞賛を博せられたといふ。斯る世界的學者の一朝不歸の客となられた事は此上もなき國家の損失であり同時に長年高師慈父と仰ぎし自分にとりては轉た追憶の情に盡きぬものがある。

# 故櫻井男爵の御靈前に

## 捧げまつる敬弔と追慕の言葉

わが邦學界の父として、われ等郷黨の誇りでありました樞密顧問官帝國學士院長正二位勳一理學博士櫻井錠二先生は遂に一月二十八日午後一時、八十二歳の御高齡をもつて長逝されました。

故博士が多學界に盡された功績に對し、畏き邊より同日特に男爵を授けられました。かくの如く臣下最高の授爵はひとり櫻井家のみならず郷黨の大なる光榮であります。今更に大先輩を失つた悲痛にわれらは哀悼措く能はないものがあります。

本誌はこゝに「櫻井男爵思ひ出の頁」を設けて、郷黨の心からなる哀悼と懷舊の言葉を捧げまつりたいと存じます。合掌。

### 男爵の親切なる一例

侯爵前田家總務 中川友次郎

櫻井男爵の親切なる一例……或日男爵より「一寸御目に掛りたい」との電話がありました。「何か御用ならば當方より罷出ます」と御答しましたら「いや自分より参りませう」とのこととなりしかば、駒場の

前田侯爵邸にて御待受け御目に掛りたる處、その御用向たるや全く男爵御自分の爲めの事柄ではなく侯爵家が相當数の株式を所有せらるゝ會社に關し参考となる事項を告げられ、損害豫防上の注意を喚起せらるゝ爲めでありました。御多用中駒場まで態々來られたる御親切は誠に有難い次第である。一寸した事の様ですが斯の如き行爲を實行し呉るゝ人は稀である。偉人は親切であると感じました。

悼惜の情に堪えない  
盛岡高等農林學校長 上村勝爾

櫻井博士が同郷の大先輩であり我學界の最高權威の一人であられたことは夙に承知致し居る所なるも、不幸にして先生に一度も面接するの光榮を得なかつたので、墓去に對して悼惜の情に堪えざるも思ひ出を語る資料のなきを遺憾とする次第である。併し我郷土から斯る大先輩を産出せることは我等の最光榮とするところであり、先生に劣らざる大家が續々として輩出せらるゝことを期待して止まざる所以である。

海軍少將 海軍 向田金一

我科學界の長老櫻井先生の長逝されたことは啻に郷黨人として哀惜の念に堪えないのみでない。故博士が我學術界に盡された功績に對して既に世に定評がある。今更贅言するも却つて禮を失するのみ謹んで故博士の英靈に對して合掌したい。

### 哀悼の念に堪えず！

男爵 前田直行

櫻井博士の長逝に就き、誠に哀悼の念に堪えず候。

### 同郷學生のため盡力

陸軍少將 加越能 矢木高太郎

故櫻井先生は學界の最高權威者たりしことは余の喋々を要せざる所なり。余は加越能育英社の事業

に従事し居る爲、同社に關する先生の功績を述べんに先生は夙に育英事業に着眼し明治初年本社創立當時大に盡瘁せられ、又東京に於ける同郷學生の寄宿舎たる、久徵館の設立に盡力し、初代館長として學生の指導訓育に従事し本社に貢獻せられたる功績は没すべからざるものとす。

### 世界學界の損失なり

陸軍少將(金澤) 水島辰男

我郷土の偉人否な日本の大偉人否や世界の大々偉人、櫻井翁閣下の逝去は實に年齢こそ不足はなきも世界學界に於ての損失如何斗なるや、就ては加能人誌は來る三月號に櫻井男爵思ひ出の頁を設けて各方面より集積して發表されることは後進者の爲め、世界學界の爲め、如何程か最大の獎勵ならん、宜敷御盡力希ふ所なり、實に我郷土の誇として一大名譽なると共に今回の逝去を見たるは誠に一大遺憾なり。

### 温容は郷人の胸裡に

尾崎合同運送 取締役社長 竹田作藏

雄大なる加能の山紫水明が生み出した郷黨の大先輩、櫻井錠二博士が長逝されました事は私共の堪え難い哀惜を感じるところであります。先生は我國學界の國寶的な存在でありまして身を捧げて、社

### 遺書より

### 櫻井錠二畧歴

(但し授爵の一項追記)

### 出生

安政五年八月十八日舊加賀藩士櫻井甚太郎の六男として金澤市に生る。

### 教育

元治元年乃至明治二年金澤に於て寺子屋式教育を受けて、國語習字及漢書の素讀を學び併せて劍道を學ぶ。明治三年一月藩立致遠館に入學して初めて英語を學び更に算術の初歩を學ぶ。次いで能登國七尾に英人オスボン氏を聘して語學所なるもの開設せらるゝや、藩より此所に留學を命ぜられ、半歳餘に渉り英語の直接教授を受く。

明治四年四月(十四歳)故郷を去つて母と共に上京し、翌月試験に合格して大學南校に入學を許され爾後同校が明治六年に開成學校(後に東京開成學校)と改稱せられて豫科一年本科三年の専門學科の設立せらるゝに及び化學を専攻學科として之に進入し、本科第二年度の課程を修了したる明治九年六月(十九歳)選拔せられて化學研究の爲五ヶ年間英國に留學を命ぜらる。同年十月倫敦大學に入學ウイリアムソン博士に就き化學を専攻する傍ら、フォースタ及びロツチ博士に就き物理學を研究し、第一學年末の試験に同學の學生百餘名中第一位を得て及第したるの故を

會に盡し温容以て後輩を誘掖せられし功績は極めて甚大であります私共は先生と郷を同じくする事を無上の誇りとし其温容より發する目に見えざる鼓舞激勵によつて受けし大なる過去の感化を偲びては限りなき感謝と感激を捧げたいと存じます。先生今や在さず、國事多端の折柄誠に痛惜に堪えませんが然れども先生の大なる偉勳は永へに學界に輝き、温容は郷人の胸裡深く止まりて無限の教訓を垂るゝ事と信じます。茲に謹んで哀悼の意を表します。

五十年前の思ひ出

住友株式會社顧問林博 村田重治

私が櫻井博士に始めて御目に掛つたのは明治十六年頃で、最早五十年以上前の事です。それは博士の御令女「文子」さんと私の遠縁に當る鈴木庸生君との結婚式をあげ

深甚なる哀悼の意を表す

陸軍大將

林 敬十郎

た時であつて即ち私が媒酌となり其の席に列なりし人は櫻井博士の外拔山庄次郎氏だけであつて、場所は元の農商務省の裏にあつた抜山氏の宅で、きわめて手狭い所であつて、部屋も三、四間しか無かつたと覚えてゐる。抜山氏はその當時、農商務省特許局長の高橋是清さんや又大臣の秘書官であつた奥田義人さん等と大變懇意であつてその爲、役人になる様にすゝめられたが、同氏は役人がきらひで自ら特許辯理士に成りて自分の生活維持して居られた故に小さい家に住んで居られたのだと思ひます。抜山氏と鈴木氏は兄弟で父上は鈴木交茂と言ふ數學の大家であつたが東京お茶ノ水的高等師範學校を卒業しておかぬと駄目だと言ふ事で當時同學校に在學中であり時々來られました。交茂氏の奥様お咲さんは今尙健在で短歌が上手

で餘生を樂んでをられます。今一つは私の長男村田重夫が東大の藥學専門に入學し居つてその頃は櫻井博士が私の長男の保證人となつて大いに指導鞭撻してくださつて學校は勿論本郷曙町の御宅にまでおじやま致しました。又博士の奥様も大變良いお方で博士が留守でも何事もよく親切に致してくだされた事も記憶して居ます。

ひたすら悲嘆の極み

男爵 奥村榮同

櫻井男爵の逝去は國家と學界の大損失と只管悲嘆の極に存候。

わが七十年の舊交者

日本美術協會副會長 中田敬義

明治以降我國學界に盡したる功績に依りて授爵の光榮に浴せし者は蓋し前後僅に六指を屈するに過ぎざりしが今度更に一人を増したる次第にて櫻井君は實に我國科學界の大先覺者たるのみならず實に世界の斯學界に於ける有名の一員たり。その偉大なる功績を嘉みせられ至光至榮の褒賞ありたるは、

面目躍如たる大往生

關東乘合自動車 車掌科監査役 宮田喜佐久

郷土の大先覺として敬慕措く能はざりし男爵櫻井鏡二博士の長逝に際し謹みて哀悼の意を表する次第であります。聞く所に依れば故博士が御生前豫め死後の諸事に至る迄詳細認め遺さして大往生を遂げられたる一事は即ち故博士の透徹したる人生觀の發露、片鱗とも云ふべきでありまして眞に故博士の面目躍如たるものあり、吾人は實に學界の權威とし將亦官界の至寶として巴みならず更に稀に見る偉人櫻井鏡二先生に對する追慕の念、愈々切なるものがあるのであります。

科學日本の第一人者

代議士 喜多壯一郎

科學日本の建設の第一人者、その先覺者としての理學博士櫻井先生を喪ふことをかなしむ。

貧乏學生(?)と博士

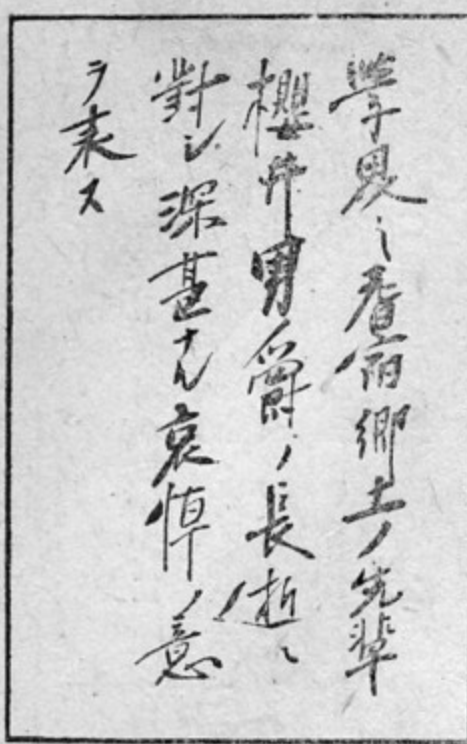
英漢義塾主(神戸) 小林風岳

君子の徳を具へ、温顔親切、而して切れ味のいゝ人であつた。東京で縣人會其他の會合のある節、郷人の貧乏學生が、會に出席はしたいが金がないといふ時分、櫻井さんに頼んで出して貰へばいと二三人も連れ立つて出席して、い

以て賞として金牌を授與さる。又第二學年には化學及物理學合併競争試験に受験者十數名中第一位を得て合格し、賞として獎學資金五〇磅宛二ケ年計百磅を授與さる。而して留學中研究論文二篇を著し倫敦學士院、倫敦化學會等に於て之を發表せり。明治十四年留學五ケ年滿期となつて歸朝す。

官職

明治十四年九月(二十四歳)文部省御用掛仰付られ、東京大學理學部講師となり、翌十五年八月東京大學教授に任ぜらる。爾後東京大學時代及帝國大學時代を経て大正八年四月に至るまで三十七年間東京帝國大學教授の任にあり、其の間明治三十四年六月評議員を命ぜられ、同四十年十二月理科大學長に補せられ、又大正元年八月總長事務取扱を命ぜられたる外、各種委員會の委員又は委員長を命ぜられたる事數十回に及び、大正八年四月願に依り本官を免ぜられ(定年)更に東京帝國大學名譽教授の名稱を授けらる。大正九年六月貴族院令第一條第四項に依り貴族院議員に任ぜられ大正十五年一月樞密顧問官拜命、昭和十一年一月議定官に補せられ又同十二年一月宗秩寮審議官仰付らる。正二位勳一等(旭日)昭和十四年一月學界に於ける勳功により男爵を授けらる。明治二十一年六月理學博士の學位を授けらる。同三十一年四月東京學士會院(後に帝國學士院)會員



學界の耆宿、郷土の先輩櫻井男爵の長逝に對し深甚なる哀悼の意を表す。

きなり櫻井さんに頼む、と厭な顔もせず、文句も言はず、ソロリと出してくれる。こんな風で、大に郷黨の後輩を愛し、又能く人の世話をした。非常な勉強家で學界では世界的に名を顯はした。房記氏、省三氏、鏡二氏と三人兄弟で、二人の兄も相當出世したが、鏡二氏が一番地位名望を収めたのも偶然でない。今計に接して眞に哀悼に堪えぬ。

明倫學館へ通つた頃

新潟縣立高田商工校長 小川延賢

郷土の大先輩、一代の碩學櫻井鏡二先生の御長逝を謹みて御弔ひ申し上げます。私共明倫學館へ月に一度宛通つた頃先生の風格を敬慕したものであります。是非先生の聲咳に接したいと思ひながら二十年を経て遂にその機を得れなくて終りました。

孝養最もあつかりし

陸軍中將 林 彌三吉

櫻井鏡二博士の學界に於ける功績に就ては敢て贅語を要せざるも其母に對する孝養最も篤かりしことに就ては蓋し知るもの稀なるべし。同氏の母堂は夫亡き後は貧窮孤獨の内に三人の男兒を川波の塾へ入れ、精勵の結果遂に三兒共博士となり、郷徒の特稱するところ、此賢母あり而して此三兒あり、母

子とも實に郷里の誇りなりと云ふべし。母堂は晩年三兒の篤遇を受け、然かも尙近親の子女を教育し大なる寄與をなし、一族中此女史の恩顧を蒙りたるもの多し。博士孝養の一々は此に列擧せざるも、身を立て、道を行ひ、名を後世に擧げ以て父母を顯はし、孝養有終の美を収めたるものと言ふべし。

御家内の繁榮を祈る

日本畫家(京都) 木村杏園

櫻井男爵長逝の報を新聞紙上に拜見した時は、郷黨第一の人格者たる大先生の訃に、驚愕痛恨の極みにてありたり。ならばなき大先生を持つは我等の常に誇りとせしなり。先生には男子女子澤山に恵まれたる所謂子福長者にして、皆それ／＼立派に成人して居られる御家庭なれば甚だ多幸多福にして名譽ある御家門の繁榮のいやが上にも榮えまさん事を謹んで御祈りするものである。

文に於ける東郷元帥

山形縣立權岡高女校長 廣川捨吉

一國の興隆は文と武と鳥の双翼の如く跛行なく振興することに依り期し得る。然るに我が日本に武に於ける東郷元帥に比する仁は、文に於て誰かあると質ねたとき、或る人は啞然と答へ得なかつた。余輩なら即座に故櫻井博士を推す

に躊躇しない。何れの方から見ても實に國寶的偉人であつたことを確言し得るのである。

恩澤に感謝する學界

慶應大學醫學部長 北島多一

櫻井先生は余の學生時代には既に名聲赫々たる大理學者で、又郷里の大先輩として我々憧憬の的であつた。其頃は非常に年も違ふ老

富士山の墨繪の様な

齊藤報恩會學術研究部主事 新谷武衛

等は須ちく故人の人格識見に學ぶべくを以て、後輩たるの光榮を輝さねばならぬとの興奮に生くべきである。如斯して故人の功績を愈々大ならしめ哀悼の意を表する事も出來ると信する事である。

櫻井先生と數回お目こかゝる機會を得たが、いつも先生の溫容に接しお話を承る時は恰も富士山の墨繪を眺めるやうに如何にも典雅な而かも崇高な感に打たれたるものである。そして又いつも先生の御記憶のいゝのに驚かされた。昭和八年十一月仙臺に於て齊藤報恩會博物館開館式が舉行せられた際先生には御多忙の御身を以て、私共の乞を容れられ帝國學士院長の御資格で御臨場せられ、私は當事者として親しく旅館に先生を訪ねて色々御打合せをした事がある。

先生はその時少し神経痛で御脚が痛いと言つて脚を伸され、要談の後には金澤殊に馬場のお話などを楽しく語られた。その後昭和十年私は一行と共に南洋學術探検に出發の折、此の計畫は櫻井先生とハワイビショップミュージアムのグレゴリ博士との間に成立した國際的の企圖であつたので學術研究會議會長であられた先生に出發の御挨拶を申上ぐべく本郷曙町の私邸を

に選舉せられ、大正二年七月より同十五年二月迄帝國學士院幹事の職にあり同年同月同院長に擧げられ、爾後再選又再選以て今日に至る。

大正九年十二月學術研究會議會員となり副會長に同十四年四月同會長に擧げられ爾來再選又再選を以て今日に至る。

尙理學文書目錄委員會々長、日本學術振興會理事長、東京女學館理事長兼館長、服部報公會理事長、啓明會評議員、三井報恩會評議員、日英協會副會長、日本中央文化聯盟副會長たるの外理化學研究所、東北更新會、英語教授研究所、癌研究會、帝國發明協會、日本度量衡協會、白十字會、日伊協會の顧問又は名譽顧問若しくは名譽會員たり。

國際關係

(1) 本邦代表として出席したる國際會議等左の通り。

- 一 グラスゴウ大學創立四百五十年祝賀會(明治三四)
- 二 萬國理學文書國際會議(明治四〇)
- 三 萬國學士院協會總會(明治四三)
- 四 科學學士院國際會議(大正七)
- 五 萬國學術研究會議總會(大正一一)
- 六 萬國理學文書國際會議(大正一一)
- 七 第二回汎太平洋學術會議(大正一二)

訪ねた。刺を通すると先生は態々  
支關迄御出ましになり一場の御話  
しの後「やあ新谷君仙臺では御厄  
介になつた、貴方(君)とは言はれ  
なかつた)は金澤でしたね、充分  
氣をつけて行つて来て下さい(く  
れ給へとは仰言らなかつた)此の  
一學徒の姓名を御記憶になられた  
事に感謝を新にすると共に、勿體  
ない程丁寧な御言葉を用ゐられる  
ところに、一死此の大任を果さん  
との覺悟を強くしたものである。  
日本學術振興會理事長としての先  
生にも御目にかつて其の御高見  
を拜聴し、又鞭撻せられたことも  
あるが割愛する。

本邦學界の耆宿、忽然として逝  
かれ今や其の溫容に接する機遂に  
無し、轉々追惜哀悼の情禁じ得ざ  
るものがあるが先生の示された指  
針、御事業は永く本邦學界に遺る  
であらう。

謹んで哀悼の誠を!

釜山石川縣人會長 不動藤太郎

櫻井博士はわが邦學界の重鎮と  
して文教に盡され、其の功績偉大  
なりし事實は、普く世の知る處に  
して、吾等郷黨の大なる誇りであ  
る。私は是非博士の溫容に接し度  
宿願が不幸遂に此機會の興へられ  
ざりしを遺憾に存すものである。  
博士は齡八十二歳の最期まで樞密  
顧問官並に、帝國學士院長として

學界最高の地位に在りし事實は、  
稀に見る郷黨の光榮と誇りとを感  
ぜしめ、氏の溫容に接すると接せ  
ざるとに拘らず斯の如き、大先輩  
を失へるは吾等郷黨人として、ひ  
としく哀惜措く能はざる處であ  
る。噫我郷黨の出身者にして博士  
の如き學德共に稀なる人士在る  
を誇りとして、心中竊に敬慕止み  
難きものありきに。在世中の先生  
は既に正二位勳一等の高位に在り  
しに、多年學界に盡されたる偉勳  
に對し畏き邊より特に男爵を授け  
られ、尙大授章を賜ひしは位人臣  
を極められたるものにして、ひと  
り櫻井家の榮譽のみならず郷黨の  
大なる光榮なり。茲に貴社を通じ  
先生の英靈に對し謹んで追悼の誠  
を捧ぐる次第である。

君は惜くもみまかりぬ

(神奈川) 河合辰太郎

國の爲め盡し功績著るき君は惜  
くもみまかりましぬ  
位山高きか上に更に又爵を賜は  
り榮えし君かも

余が接したる故博士

(東京) 福島保三郎

櫻井錠二博士の學識深遠、徳の  
君子なることに付ては餘りにも能  
く世間に普及する所にして今更之  
に加ふる辭を知らず、余が博士に  
接したる時の一二を擧ぐれば博士

の人格一斑を窺ふに足る。一日  
博士を訪問して或公益に關する事  
に付博士の御援助を請ひたるとき  
博士が「それだけのことなら態々  
來られなくても電話にて言はれて  
もよかつたのに」との御挨拶にて  
恐縮したことがあつた。而して此  
事は間もなく博士の御援助により  
好果を結びたり。又本年二月八日  
に外務省法律顧問ベテイ博士古稀  
の壽を祝する爲め何か記念の品を  
贈らんと紅白梅會員の有志が企て  
たことあり、博士も數年此會員に  
てあらせられたるにより余より博  
士にも御問合したる處、博士は直  
ちに釀金を封入したる書狀を賜は  
つて宜敷取計様にと鄭重なる御申  
越があつた。而も其書狀は一月二  
十三日附にして遂に此贈品の捧呈  
の式場には博士の溫顔を見ること  
能はざりしは悲哀の極みなり。依  
つて余は此釀金者有志の署名を録  
する「令德壽堂」の一卷を製して一  
月二十三日付の博士の書狀を之に  
貼附したり。

葦子の喋々を要せず

京城商工會議所議員 坪野與一郎

故正二位勳一等男爵櫻井錠二閣  
下御長逝の訃音に接し、我帝國有  
史以來の非常時の際國際的大損  
失にて、又一面我が郷黨の誇りを  
失ひたるに想倒するとき轉々感慨  
無量哀悼痛惜に堪へざる處なり。  
嗚呼、閣下の御功績に對し畏くも  
特に男爵を授け賜はりし一大光榮  
は閣下の凡てを飾るものにして、  
敢へて葦子の喋々を要せざる處な  
りと信ず。茲に謹みて敬弔の誠意  
を捧げ白す。

大學者にして政治家

商業組合中央會長 鶴見左吉雄

櫻井博士の薨去は實に驚愕に堪  
えなかつた、その數日前に開かれ  
た學術振興會の理事會に理事長と  
して博士は鮮かな議長振を發揮せ  
られ非常時下の科學振興につきて  
の抱負や、將來の計畫に付立派な  
意見を述べて居られ非常に元氣で  
あつたので、急逝には誰もが驚い  
たのである。

博士なき後、諸方面に於ける後  
繼者が物色されて居るが、再び博  
士の如き科學者の泰斗にして政治  
的力量に富む適任者は容易に見つ  
からぬので、今更ながら同博士の  
偉大な存在であつたことが偲れ

偉業を仰ぐ天寒し!

桂井未翁

永久にのこる偉業を仰ぐ天寒し

(次號に續掲)

八 萬國學術研究會議總會(昭  
和三)

九 萬國化學協會總會(昭和三)

一〇 萬國學術協會會議總會(萬  
國學術研究會議總會)(昭和  
一一)

(一一)

(2) 國際學術機關の役員に選舉せら  
れたること左の如し。

萬國化學協會副會長(自大正一  
一至大正一四及自昭和三至昭和五)

第三回汎太平洋學術會議會長(大  
正一五)

萬國學術協會會議(萬國學術研  
究會議)副會長(自昭和一二在任  
中)

(3) グラスゴー大學より名譽法學博  
士の學位を授與され(明治三四)又  
倫敦大學より名譽學友の稱號を授  
與され(昭和一一)たる外左記學會  
の名譽會員に推薦せらる。

佛國化學會(大正一一)、英國化  
學工業協會(大正一一)、英國ロー  
ヤル・インスチテューション(大正  
一四)、米國化學會(大正一五)、ソ  
聯學士院(昭和二)、ポーランド化  
學會(昭和四)、倫敦化學會(昭和  
六)以上

る、七十年に亘る科學界に遺され  
た巨大な足蹟は永久に決して消へ  
ぬであらう。